

国立国会図書館蔵『浜松中納言物語目録』の依拠本（二）

赤迫 照子

The text to make the catalog of Hamamatsu Chunagon Monogatari in the National Diet Library

Shoko AKASAKO

二、伝本系統・共通脱行箇所

彰考館蔵村上真澄校本における共通脱行箇所⁽⁸⁾は27箇所である。伝本系統は、松尾聰氏による分類のD類、池田利夫氏による分類では乙類第三種である。共通脱行箇所、補入の印をして本文を傍書したのは、25・30・39・42・66・71・72・78・94・103・106・108・126・129・130と、15箇所存する。この内、「イ」と明記してあり、異本との校合による補入であるのが確実なのは39・71・129・130で、中でも71はA類／甲類本でなければ補えない本文である。「イ」注記がない傍書の内、30・72・78・94・106・108・126の7箇所も、A類／甲類本でなければ補えない。

さらに、共通脱行箇所ではない巻二・九ウ8「くに／＼のつかさとも〇かきりなし」の、補入印「〇」の左に傍書「こそりてまちよろこひきこえさせたるさまともかきりなし」とあるのも、A類／甲類の本文による。『校本』二一三頁によれば、この傍書と同じ本文を有するのはA類／甲類本と、校合によって本文を整えた丹鶴叢書本（F類／乙類第一種本）である。

A類／甲類本は十点確認されており、この本文は以下の通りである。⁽¹⁾

- (1) 「つかさともこそりてまちよろこひきこえさせたるさまともかきりなし」
 - ・ 国立国会図書館蔵榊原芳埜旧蔵本
 - ・ 宮内庁書陵部蔵藤波家旧蔵本
 - ・ 前田育徳会尊経閣文庫蔵本
 - ・ もう一点の水戸彰考館蔵本（資料番号「巳／四」）

- ・ 京都大学国文学研究室蔵小山文庫旧蔵本
 - ・ 天理図書館蔵竹柏園文庫旧蔵本
 - ・ 鶴見大学図書館蔵祖型本（小学館新日本古典文学全集 巻二の底本）
 - ・ 茨城大学図書館蔵菅文庫本（須田哲夫氏・佐々木新太郎氏編『校訂 浜松中納言物語』（勉誠社 平17）の底本）
- (2) 「つかさともこほりてまちよろこひきこえさせたるさまともかきりなし」
 - ・ 静嘉堂文庫蔵進本迺舎旧蔵本
 - (3) 「つかさともこほりてまちよろこひ聞へさせたるさまともかきりなし」
 - ・ 広島大学国語学国文学研究室蔵琴平書籍館旧蔵本
- つまり、村上真澄校本はその内題「濱松中納言殿物語」と本文の様相から本居学派で書写されたD類／乙類第三種本ではあるが、村上真澄による他本からの補入で、A類／甲類本文との混態を見せているのである。
- では、校合に用いたA類／甲類本はいかなる本なのか。校合に用いた異本については記載がなく、今のところ何もわからない。ただ、同じ水戸内に彰考館蔵本（資料番号「巳／四」）と、水戸藩の史学者で彰考館に勤めた菅政友（文政七年（一八二四）—明治三十年（一八九七））自筆の菅文庫本が存するのは、偶然とは思えない。ちなみに小松氏は、『古事類苑』編纂に参加した和学者

二〇一八年一月九日（受理）

赤迫 照子 宇部工業高等専門学校一般科准教授

榊原芳埜（天保三年（一八三二）—明治十四年（一八八二））自筆旧蔵本と水戸彰考館蔵本（資料番号「巳／四二」）は兄弟本だと推定されており、また、須田氏は、榊原芳埜旧蔵本と菅文庫本もやはり兄弟本だとされている。すなわち、これらの三点はどれも、ある近世初期の善本の写しということになる。

村上真澄なる人物であるが、芳賀矢一氏編『日本人名辞典』（大倉書店 大 3）の「村上真澄」項に、別称は新左衛門、石見浜田の人で本居大平門下とある。果たして、該本の校合者と同一人物なのであるか。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」を検索すると、著作として『日本紀万葉之語考』（『うきしまりそりたし考』『水干考』『ひたけ考』『東百官考』等と合冊）・『神楽催馬楽小説東遊』・『催馬楽小説』（文化十三年（一八一六）成立。彰考館所蔵写本あり）・『斉明紀童謡の考』・『古文類葉』（文政十一年（一八二八）成立）・『古葉類聚』（文化十三年写本あり）が見つかる。斎藤彦麿著『嵯峨の山布見』には文化十三年跋を寄せている。文化文政年間に盛んに著作活動をしたようであるし、また、「はじめに」に記したように該本には「天保六年十一月村上真澄一校畢」とあるので、村上真澄は榊原芳埜や菅政友より早い生まれということになる。

さて、では以下に共通脱行 27 箇所を掲出し、村上真澄校本が D 類／乙類三種と A 類／甲類本文が混じり合う様相を示す。最初に池田氏による番号と、丹鶴叢書を底本とする宮下清計氏校注『新註国文学叢書』（講談社 昭 26）本文を示し、脱行部分には傍線を付す。続いてその頁数・行数を記す。次の（ ）内には脱行させた伝本の略号を A～F 類の分類名とともに掲げる。略号は『校本』のものを使用し、底本である C 類／乙類第一種の不二文庫本は「不」とする。○以下には村上真澄校本の本文を示し、（ ）内に丁数・行数を記す。レイアウトの都合上、傍書を※以下に記した場合がある。

卷一：8 箇所

- 1 知らまほしきに、后、御簾をおろして入り給ひぬ。飽かずなかなか、半なる月を 一〇二・12（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）
- しらすほしきになかななる月を ※「す」左に見せ消ちあり（一一ウ 8）
- 5 眺めけむ人のやうに、この戸閉ぢられて、心細く、あるかひなき様に侍れど、一〇九・8（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）
- なかめけむ人のやうに侍と（二二ウ 3）
- 12 かへりきたるに、世に馴れぬ人にはあらざんめり。誠につつむべきにこそはあらめ。 一二五・1（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、

E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○返しきたるにつゝむへきにこそはあらめ ※「し」左に「○」あり（四六才 5）

14 なりまさるにつけても、この後の、見し人にもいとよう覚えしも見奉らほしうて、 一二八・11（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○成まさるにつけてもみたてまつらまほしうて（五一ウ 7）

18 ありける事のやうにて、隠し養ふに、日に日に物を引き延ぶるやうにて、ゆゆしきまで、 一三八・4（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○ありける事のやうにてゆゝしきまで（七〇ウ 5）

22 実にあるわざにこそと思しつづく。明後日ばかり帰り給はむとの夜、月隈もなく、 一五五・6（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○けにあるわざにこそと月くまもなく（九五才 8）

24 このついでに、忍びがたき心のうちをうち出でぬべきにもさすがにあらざ、 一五八・3（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○このついでにもさすがにあらす（九九ウ 9）

25 むげに屈じにける心なりかしや。歎きあかさむかひなければ、泣く泣く、

一六一・1（D 居乃無春）

○むげにくんしに。なくなく ※「に」左に「ける心なりかしやなげきあさんもかひなければ」（二〇三才 6）

卷二：5 箇所

30 つかさども、挙りて待ち喜び聞えさせたる様ども限りなし。 一七〇・2

（B 宮忍理閣歌、C 松浅鶯尾荊不、D 居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○つかさともかきりなし ※「○」左に「こそりてまちよるこひきこえさせたるさまともかきりなし」（九ウ 8）

31 引き違へ、さばかり限りなきものに思しかしづかれ、めでたかりし人の、 一七二・2（D 居乃無春）

○ひきたかへさつかれめてたかりし人の（一二才 8）

36 思ひ給へられ侍りつるを、人の御さまのなべてならぬ心地し侍りつるに 一七九・2（D 居乃無春）

○おもひ給へられ侍りつるに（二二才 6）

- 39 中将の乳母は、若君具し奉りて、他船にてのぼる。心知らぬ人は 一八八
 ・ 13 (D居乃無春)
- 中将のめのは○しらぬ人は ※「○」右に「わか君ぐし奉りてこと舟にてのぼる心イ」(三四ウ3)
- 42 あはれにいみじと見奉り給て、うち泣き給ひぬる、いとさまよく 一九一
 ・ 1 (D居)
- あはれに○さまよく ※「○」右に「いみしと見奉り給ひてうちなき給ひぬるいと」(三七オ8)
- 卷三：10 箇所**
- 66 おはすらむ有様を、え聞き知らぬ悲しきを歎き給ひて、いかでかおはすらむ有様を聞かむと、 二三一・14 (D居乃無春)
- おはすらんありさまを○きかんと ※「○」左に「えきゝしらぬかなしきをなけき給ひていかてかおはすらんありさまを」とあり(二五オ8)
- 70 おなじ色の織物ども、撫子の織物の桂重ねて、 二三五・7 (D居乃無春)
- おなじ色のおりものゝうちきかさねて(二八ウ2)
- 71 心もなし。とてもかくても言ふ方なく、思ふ方なく思ひ隔て、遙かに 二三七・4 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荊不、D居乃無春、E神花千刈和、F育由保百狩)
- 心もなし○はるかに ※○右に「とてもかくてもいふかたなく思ふかたなく思ひへだてイ」(三一オ3)
- 72 情けなうこそおはしけれど、心劣りして、妬う悔しう覚えければ、母北の方、 二三八・3 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荊不、D居乃無春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)
- なさけなくこそおはしけれど○はゝきたのかた ※「○」右に「心おとりしてねたうくやしうおほえければ」(三二オ4)
- 78 かきませのきはだに、かやうの艶ある暁の別れを忍ばせんと、用意せむほどは、 二四三・8 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荊不、D居乃無春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)
- かきませのきはたに○いせんとは ※「○」右に「かやうのえんあるあか月のわかれをしのはせんとようひ」(三八ウ6)
- 94 行きあひ奉りて、後の思すらん御心のうちを、見まほしく思ひわびつつ、 二五九・2 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荊不、D居乃無春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)
- ゆきあひたてまつりて○わびつゝ ※「○」右に「后のおほすらん御心のうちを見まほしく思ひ」(五六ウ5)
- 103 あたらしうめでたき御女を、いたづらになして、我を心やましうつらしと
- 思しけむ親の御心のうちを思ひ続けるに、 二六六・2 (D居)
- あたらしう○つらしとおほしけんおやの御心のうちを思つゝくるに ※「○」右に「めでたき御むすめをいたづらになしてわれを心やましう」(六六オ8)
- 106 通れやらんことも、さのみさかしきやうに、人々の思さんこともつつましう、 二六七・3 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荊不、D居乃無春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)
- のかれやらん事も○つつましう ※「○」右に「さのみさかしきやうに人くのおほさん事も」(六七ウ6)
- 108 住み離れなましには、劣ることかなと思せど、いかがは宣はむ、などてかよのつねならんにて、 二六七・6 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荊不、D居乃無春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)
- すみはなれなましには○よのつねならんにて ※「○」左に「おとる事かなとおほせといかゝはの給はんなどてか」(六八オ1)
- 111 思ひかけぬに、かう立ち寄り尋ねさせ給へば、さりとも何となう侍りなん草の庵の 二七一・7 (C尾)
- 思ひかけぬにかうたちよりたつねさせ給へばさりとも○けかなうなりなん草の庵の ※「○」右に「なにとなう侍りなん」(七三オ10)
- 卷四：4 箇所**
- 117 何ばかりの事があらむと、思ふやうになづらひよる事あらじと思ひあなづりしを、 二八八・10 (B閻滋、C松尾不、D居乃無春、E浜神花千刈和、F育由保百)
- なにはかりの事かあらしとおもひあなづりしを(一七ウ8)
- 126 もとよりの人とても、思ひやりありて、実に懐しう言ひあはすべき人もなし。 三〇六・6 (B宮忍理闍歌、C松浅尾荊不、D居乃春、E浜神花千刈和、F育由保百狩)
- もとよりの人とても○なし ※「○」右に「思ひやりありてけになつかしういひあはすへき人も」(四一ウ2)
- 129 春頃より思しいそぎ、つらくすべきやうなど、委しく言ひ置き給ふを、 三〇八・10 (D居乃無春)
- 春ころよりとおほし○いひをき給を ※「○」右に「いそぎつくらすべうなどくはしうイ」(四四オ7)
- 130 もろこしに思ひ立ちし程の道の有様、彼処に往き著きての事ども 三一〇・13 (D居乃春)
- もろこしに○いきつきての事ども ※「○」右に「おもひたちしほどのみちほどのありさまかしこにイ」(四七オ5)

三、上部余白の書入

村上真澄校本は一面十行。全で一筆と見られる。行間には見せ消ち・誤字訂正・「イ」注記・漢字表記・濁点等が多数存するが、ここでは上部余白に存する書入 71 箇所を一覧する。濁点がある字はそのままだ載せた。

「」の通し番号に続いて施注本文を記し、() 内に丁数・行数を記す。以降には、小学館新編日本古典文学全集の本文・() 内に頁数・行数を記す。次の○には書入本文を記す。典拠がある場合は：に続けて引用した。

卷一

〔1〕内題「濱松中納言物語 壹」(一才)

○与清按此の物語蓋缺首卷

〔2〕おもふかたのかげなんことにふきをくる心ちして(一才五)：思ふかたの風なむことに吹き送る心地して(三二一三)

○松風巻思ふかたの風にてかきりける日にてたかへす給ひぬ玉葛巻思ふかたの風さへすゝみてあやふきまてはしりのほりぬ：『源氏物語』松風・

四〇七頁「思ふ方の風にて、限りける日違へず入りたまひぬ」、玉鬘・

一〇〇頁「思ふ方の風さへ進みて、危きまで走り上りぬ」

〔3〕さうはみちとをし くもせんり(二才一)：着波路遠し雲千里(三二一三)

○和漢朗詠集註哥は行旅部橘直幹石山作二着波路遠雲千里白霧深鳥一聲ト云々：『和漢朗詠集』下・行旅・六四六・橘直幹「着波路遠雲千里 白霧

山深鳥一声」

〔4〕かんこくのせき(二才五)：函谷の関(三二一六)

○史記孟嘗君伝：『史記』卷七十五・孟嘗君列伝第十五の函谷関の鶏鳴の故事。

〔5〕日本のでんふ(二ウ九)：日本のでんふ(三二一五)

○職員令 少納言釋下「鈴印傳符云云：『令集解』第二・職員令太政官条「少納言三人。掌下奏宣小事。請進鈴印傳符。進付飛驒函鈴。」

〔6〕むつれまほしく(七才一)：むつれまほしく(三六一一)

○むつれ 帚木巻 むつれ聞え給ける 同 よのたとひにてむつれ侍らすと申す云云：『源氏物語』帚木・五五頁「心の中に思ふことをも隠しあへずなむ、睦れきこえたまひける」、同一〇六頁「もて離れてうとうとし

くはべれば、世のたとひにて睦びはべらず」

※〔6〕書入は上方余白ではなく、喉にあり。

〔7〕きたかく(一〇ウ四)：けだかく(四〇〇七)

○きたかくはけたかく成へし

〔8〕るく〇ひる ※〔〇〕左に「唇」とあり(一〇ウ五)：くちびる(四〇〇七)

○るくひるはくちびるノ誤歟

〔9〕らんけひえんのあらしの(一一ウ二)：蘭蕙苑の嵐の(四一三)

○朗詠 蘭蕙苑嵐摧紫後蓬萊洞月照霜中

〔10〕この花ひらきてのち(一一ウ五)：この花開けて後(四一四)

○此花開後更無花 本朝文粹：『本朝文粹』第十一・詩序四・秋尽日翫菊 忘令・菅贈大相国「古七言曰、大底四時心愔苦、就中腸断是秋天。又曰、不_レ是花中偏愛_レ菊、此花開後更無_レ花」

〔11〕三ば四ばの殿つくりして(一六才七)：三つば四つばの殿造りして(四五一一)

○此とはむへもとみけり さき草のみつはよつはにとのつくりせり：催馬楽「此殿」「三枝の三つば四つばの中に殿づくりせりや殿づくりせりや」

〔12〕およすげ給(一七ウ四)：やうやうおよすげ給ふままに(四六一三)

○およすけ 多き詞也 智恵ツキアイラシキヲ云也

〔13〕とりとなら(一七ウ十)：鳥とならば(四七七一)

○長恨哥 在天願為比翼鳥：『長恨歌』第一一七・一一八句「在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」

〔14〕らうたげなりし(二五才四)：らうたげなりし(五三一一)

○らうたげ イトホシキ心也 ナツカシキ心也

〔15〕はるやむかしの(二五ウ九)：春や昔の(五四七)

○月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして：『古今集』恋五・七七・在原業平、『伊勢物語』第四段「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」

〔16〕たうくゑん(二六ウ十)：桃源といふ水のほとりを見れば(五四一四)

○桃源行：王維『王右丞文集』卷第一「桃源行」。

〔17〕あらたに見つるも(二七才三)：あらたに見つるも(五五六)

○あらたはあらはの誤歟

〔18〕十月のとせいの(二八ウ六)：十月の洞庭の(五六一一)

○とせい

〔19〕てまさぐりにして(三四才九)：手まさぐりにして(六二一三)

○てまさぐり 橋姫巻 はちを手まさぐりにしつゝ 此外多詞也：『源氏物語』橋姫・一三九頁「撥を手まさぐりにしつゝあたるに」

〔20〕かうさび(三九ウ四)：神さび(六七一)

○かうさび 神さび歟

〔21〕水はくむまで（四〇才4）：月かげの浮べる水は汲むまでにあはれいく世をながめ来ぬらむ（六七8）

○みつはくむ

〔22〕けうちなる中に（四〇ウ10）：けうらなる中に（六八6）

○けうちはきよら也

〔23〕かたはらこの（四一才4）：かたはら目の（六八9）

○かたはら かたはらめと云同

〔24〕おどろきあさむけしき（四二才1）：おどろきあさむけしき（六九4）

○若菜下 めてあさむ：『源氏物語』若菜下・一七六頁「よろづのことにつけてめであさみ」

〔25〕天にあらはひよくのとりとなり地にあらはれんりのえたとならん（六二ウ10）：天にあらは比翼の鳥となり、地にあらは連理の枝とならむ（八二三）

○長恨哥 在天願為比翼鳥 在地願為連理枝：〔13〕に同じ。

〔26〕あなたうと（八〇才4）：あなたふと（九八5）

○あなたふとけふのたふとさやいにしへもかくやありけんけふのたふとさ：『源氏積』・『奥入』・『河海抄』・乙女・一六八「あな尊 けふのたふとさや いにしへも はれ いにしへも かくやありけむ や けふのたふとさ や あはれ そこよしや けふのたふとさ や」

〔27〕うつほのものがたりの（八一ウ5）：宇津保の物語の（九九9）

○うつほの物語 なん風はし風 なんふは錦の袋ニ入テ秘ス 俊景ノ女北山ニテセマリシトキ弾又吹上卷ニ神泉苑ニテ仲忠弾 はし風ハ褐ノ袋ニ入テ秘ス：『宇津保物語』俊蔭・四六頁「錦の袋に入れたる一つと、褐の袋に入れたる一つ、錦のはなん風、褐のをばはし風といふ」、同八四頁「このなん風の琴を取り出でて、一声弾き鳴らすに」、吹上上・五三二

「右大将のぬし、持たせたまへるなん風を、帝に「これなむ仲忠が見たまへぬ琴にはべるなり。仕うまつらせむ」と奏したまふ。賜はりて何心なくかき鳴らすに、天地ゆすりて響く」

〔28〕雲井のほかの（八六才8）：雲居のほかの（一〇三15）

○うしと思ひあはれと思ふしらすりし雲井のほかの人のちきりを：唐后の和歌「憂しと思ふあはれと思ふ知らざりし雲居のほかの人の契りを」（巻一・七一6）

卷二

〔29〕こゝしう（七ウ2）：子々しう（一三14）

○こゝしう 紅葉賀 こゝしうなまめいたるこちを云々 河海 巨々シウトアリ 可考 大ヤウナル心カ：『源氏物語』紅葉賀・三一三頁「こ

しうなまめいたる筋をえなむ見せぬ」、『河海抄』卷四・紅葉賀・二七二頁「こゝしうなまめたるすちを 古々 ふるめかしき心也 或巨々玉篇云巨大也 たとへは大人ノ躰也」

〔30〕さいまくれたるやう（七ウ4）：さいまくれたるやうなる（一三二1）

○さいまくれたるやうなり

〔31〕いひあはめ給に（八ウ10）：言ひあはめ給ふに（一三三4）

○いひあはめ 帚木卷ニ式部とあはめにくみて 河 淡悪あはくしとにくむ也トアリ 日けにあくあはめられたてまつるもことほりなる心まとひを云々 セハメタル心也トモ云リ：『源氏物語』帚木・八八頁「言はむ方なしと式部をあはめ憎みて」、『河海抄』卷二・帚木・二二七頁

「淡悪 あはくしくにくみ也」

〔32〕やまなしのはな（九才4）：山梨の花（一三三9）

○山なしの花 総角卷山なしの花そのかれんかたなかりける 六帖世の中をうしといひてもいつくにか身をはかくさん山なしの花」：『源氏物語』総角・二四七頁「山なしの花ぞのがれむ方なかりける」、『古今和歌六帖』第六・山梨・四二六八「世の中を憂しといひてもいづこにか身はば隠さん山梨の花」

〔33〕左大臣の御この（九才4）：左に「子」とあり（九ウ5）：左大臣の御子の、権の中將（一三四9）

○御このえのは御子の近衛の中將トアリシカ脱タルニヤ 異本モ同シ

〔34〕まくらよりあとよりこひのせめくる心地しる（十五才5）：枕よりあとより恋の責め来る心地して（二四〇2）

○枕よりあとより恋のせめくれはせんかたなみにねをのみそなく：『古今集』雑体・一〇二三・読人しらす「枕よりあとより恋のせめくればせむ方なみぞ床中に居る」

〔35〕五の君のなくさめやはと（一六ウ8）：五の君の「なぐさまめやは」と（一四12）

○上ノ巻かたみそとくるゝ夜ことになかめてもなくさまめやはなかななる月：五の君の和歌「かたみぞと暮るる夜ことにながめてもなぐさまめやは半ばなる月」（巻一・二二13）

〔36〕ゆくゑもしらすはてもなく（一七才8）：ゆくへも知らず果てもなく（一四二）

○我恋はゆくへもしらすはてもなしあふをかきりと思ふはかりそ：『古今集』恋二・六一・凡河内躬恒「我が恋はゆくへも知らず果てもなし逢ふを限と思ふばかりぞ」

〔37〕むなしきそらに（一七才9）：むなしき空に満ちぬばかりに（一四二7）

○我恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれともゆくかたもなし：『古今集』恋一・四八八・読人しらず「我が恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」

〔38〕ささやかにあへかにらうたけなるけしきかひなての人とおほえず（十九才一）：ささやかに、あへかにらうたげなるけしき、かいなでの人とおほえず。（二四四三）

○ささやか チヒサキ体也 あへか ヒハツニヨウワキ心ト云リ らうたけカワイラシキ也 かいなへ カキナテ也 一通り也 イツレモ多キ詞也

〔39〕のちせの山をたのめて（二一才八）：こまやかに後瀬の山を頼めて（一四六九）

○万葉四 五十二 云々人者雖云若狭道後瀬山之後毛将合君：『万葉集』卷第四・相聞・七四〇・坂上大嬢「云云 人者雖云 若狭道乃 後瀬山之後毛将合君」

〔40〕こちなくあやしかりけるわさかな（二六才六）：こちなくあやしかりけるわさかな（一五一六）

○こちなく 蛭巻無骨也：『源氏物語』蛭・二二二頁「骨なくも聞こえおとしてけるかな」

〔41〕はこさきのまつは（二六ウ七）：箱崎の松は契りもなかりけり何に心をかけて待たまし（一五一四）

○箱崎 筑前也

〔42〕ためこそ人の（二七才二）：ためこそ人の（一五二六）

○ためこそ人の

〔43〕あひなくほいなきを（二七才十）：あいなく本意なきを（一五二一）

○あひなく 何トナク也

〔44〕めひさき（四三ウ二）：目ひさき（一七〇二）

○めひさき 履中紀阿曇連演子カ死ヲユルシテ黥シムコレヲ時人曰阿曇

目「コレニハ非シ猶可考：『日本書紀』第十二・履中天皇・元年「夏四月辛巳朔丁酉、召阿曇連浜子、詔之曰「汝与仲皇子共謀逆、将傾国家、罪当于死。然垂大恩、而免死科墨、即日黥之。因此時人曰阿曇目」

〔45〕をこつりきこえ給て（四三ウ九）：をこつり聞こえ給ひて（一七〇七）

○をこつり 夕霧卷さすかに此宮のけしきなくをこつりとらんの心にてあさむき申給へは云々 紀ニ誘ヲコツリ 賀茂保憲女集ニをこつり竿にかゝ

れる事をくゆるト云リ 招釣ノ美ナルヘシ：『源氏物語』夕霧・四二九頁「さすがに、この文の気色なくをこつり取らむの心にて、あさむき申

したまへば、『日本書紀』第三・神武天皇「盛設宴饗、誘虜而取之」他、『賀茂保憲女集』序文「露けしといひて、すむはかけをらして、をこつりぎをにかかれることを、くゆるけぶりさきにたたず」

〔46〕みつあさみになりたためる世のなかに（四四才三）：水浅みになりためる世の中に（一七〇一〇）

○水あさみ

〔47〕にひいろかうそめなど（四五才三）：鈍色、香染など（一七一八）

○にひ色 鈍色也 僧尼ノ服色也

卷三

〔48〕ひたふるにかしらをろして（五ウ五）：ひたぶるに頭おろして（二〇四五）

○尼髪と成て後又一向に剃る事

〔49〕雲井のほかの人のちきりはとの給ひし人の（一〇才五）：雲居のほかの人の契りは（二〇九六）

○一卷 うしと思ふあはれと思ひしらさりし雲井のほかの人のちきりは
 ■■■后：「28」に同じ。■■は不読。

〔50〕けふもくれぬとはかりは（一六ウ九）：今日も暮れぬとばかりは（二一六四）

○けふの目もくれぬとはかりかねきゝて身の入相をする人そなき：不明。参考『壬二集』一五六〇「春も暮れ身の入相も近ければ哀とぞ聞く山寺の鐘」

〔51〕ふしみのさとならねど（一八才六）：伏見の里ならねど（二一八九）

○人のよも我よもへなんすか原やふしみの里のあれまくをしも：『古今集』雑下・九八一・読人しらず「いざここに我が世は経なむ昔原や伏見の里の荒れまくも惜し」

〔52〕もしほのけふりの（三七才二）：藻塩のけぶりの（二三九四）

○すまのあまのもしのけふり風をいたみ思はぬかたにたなひきにけり：『古今集』恋四・七〇八「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり」

〔53〕のち世のやまをも（三七ウ五）：後瀬の山をも（二三九三）

○万葉かにかくに人はいふともわかさ路の後瀬の山の後もあはん君 後瀬山後もあはんと思へこそしぬへき物をけふまでもふれ：「39」に同じ。『万葉集』卷第四・相聞・七四二・坂上大嬢「後瀬山 後毛将相常 念社

可死物乎 至今日毛生有」

〔54〕一こゑあかすと聞し（四三ウ八）：一声にあかずと聞きし（二四七四）

○古今 夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一聲にあくるしのゝめ：『古今集』

夏・一五六・紀貫之「夏の夜の臥すかとすれば郭公鳴く一声に明くるしのめ」

〔55〕なくにしとまるものならば（四九才2）…泣くにしとまるものならば（二五三12）

○ちる花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは…『古今集』春下一〇七・典侍治子朝臣「散る花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは」

〔56〕むなしきそらにみちぬはかり（四九ウ4）…むなしき空にみちるばかり（二五四6）

○我恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれともゆくかたのなき…〔37〕に同じ。

〔57〕ほうらいとうの月（六〇ウ7）…蓬萊洞の月（二六六8）

○朗詠 蘭蕙苑^{ランケイエン}風推紫^{フエマシ}後 蓬萊洞月照霜中…〔9〕に同じ。

〔58〕いりぬるいそのこゝち（六八ウ10）…入りぬる磯の心地（二七四13）

○潮みては入ぬる磯の草なれや見らくすくなくこふらくのおほき…『万葉集』卷七・譬喩歌・一三九八、『拾遺集』恋五・三一八・坂上郎女「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく恋ふらくの多き」

卷四

〔59〕たつきもしらぬおく山に（一六ウ9）…たづきも知らぬ奥山に（三〇二15）

○古今をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふことりかな…『古今集』春上・二九・読人しらず「をちこちのたつきも知らぬ山中におほつかなくも呼子鳥かな」

〔60〕雲井のほかの人のちきりは（三三才9）…雲居のほかの契りは（三一九15）

○一巻うしと思ひあはれと思ふしらすりし雲井のほかの人の契を…〔28〕に同じ。

〔61〕御たゞがほ（三六才6）…御素顔（三三三1）

○御たゞかほ

〔62〕おほみの物かたり（三七ウ9）…大井の物語（三二四9）

○大井の物語

〔63〕さそふ水あらは（四一才8）…さそふ水あらば（三二八10）

○今はたゞ身をうき草の根を絶てさそふ水あらはいなんとそ思ふ…『古今集』雑下・九三八・小野小町「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水

あらばいなむとぞ思ふ」

〔64〕たけの中よりみつたりけんかくやひめよりも（六〇才2）…竹のなか

より見つけたたりけむかぐや姫よりも（三四八14）

○竹取物語

〔65〕中納言あるしだちてけいひめいしつゝ（六二ウ10）…中納言、あるじだちてけいひめいしつゝ（三五14）

○けいめい 玉小^{タマコ}河海^{カウミ}經營^{ケイギョウ}アルニ從^ツヘシ…『源氏物語玉の小櫛』六・夕顔・三七八頁「けいめい^同 河海に、經營とある是也²⁴」

〔66〕をのしくれのやとならんかし（六五才2）…をのの時雨の宿ならむかし（三五四1）

○をのしくれのやと 手習卷ノ7ニヤ…『源氏物語』手習卷に同語なし。

〔67〕す^{サカ}ろなるみつうまやにて（六九ウ7）…すずるなる水駅にて（三五九6）

○水うまや 初音真木柱竹川卷ナトニ見ユ踏哥ノ人饗宴スルニ肴酒ハカリヲハ水駅ト云フ…『源氏物語』初音・一五九頁「夜もやうやう明けゆけば、

水駅にて事そがせたまふべきを」、真木柱・三八三頁「こなたは水駅なりけれど」、竹河・七三頁「水駅にて夜更けにけり」

〔68〕おばすて山の月をみんちちして（七〇ウ3）…姨捨山の月を見む心地して（三六〇6）

○わか心なくさめかねつさらしなやはすて山にてる月をみて…『古今集』雑上・八七八・読人しらず「我が心慰めかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て」

〔69〕雲井のほかの（七一才5）…雲居のほかの（三六〇15）

○一ノ巻 うしと思ひあはれとも思ふしらすりし雲井のほかの人の心を…〔28〕に同じ。

〔70〕むなしきそらにみちぬるこゝちして（七一ウ3）…むなしき空に満ちぬる心地して（三六一6）

○我恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれともゆくかたもなし…〔37〕に同じ。

〔71〕しきふ卿宮はとこのうらのなみかけ給てしより（八〇才6）…式部卿の宮は、とこの浦の浪かけ給ひてしより（三七〇2）

○此前²式部卿宮うへこそはいそきたちけれとこの浦の波のよるへはなかりけりやは…式部卿宮の和歌「うべこそはいそぎ立ちけれとこの浦の浪のよるべはなかりけりやは」（巻四・三五七八）

「はじめに」で述べたように村上真澄校本は『目録』依拠本の推定丁数と全く同じで、さらに、語句掲載箇所丁数・表裏も一致する。上部余白の書入の語句と『目録』掲出語句も、多く一致を見せている。とはいっても、例

えば『目録』の「箱崎の松」二ノ廿七オ同ノ廿六ウ「おほみの物語 古物語也四ノ卅七ウ」は各々、「41」「管崎 筑前也」(二六ウ7)「62」「大井の物語(二七ウ9)」とあるが、これらは固有の地名や物語名なので「一致を見せている」と殊更言えるレベルではない。「かうさび」神さび也一ノ卅九ウと「20」かうさび 神さひ歟(二九ウ4)、「かたはら」かたはらめと云と同一ノ四十一オと「23」かたはらかたはらめと云同(四一オ4)あたりも、語句の解釈としてはありがちな記述であって、「一致」とは言い難いかもしれない。しかしながら以下の二例は、明らかに『目録』と書入が一致するのである。

- (1) まゆものよりきたかくきは気歟一ノ十ウ
 ↓「7」きたかくはけたかく成へし (一〇ウ4)
 (2) 尼の一向に髮剃る事三ノ五ウ
 ↓「48」尼髮と成て後又一向に剃る事 (五ウ5)

(1)は、『校本』二一頁によれば他本は「まゆものよりけたかく」で、B類／乙類第二種の不忍文庫本のみ「まゆものよりけたかく」とある。『校本』使用のD類／乙類第三種の、①静嘉堂文庫蔵本居宣長奥書本②無窮会神習文庫蔵本③不二文庫蔵松乃や旧蔵本④松本市立図書館蔵春廬屋旧蔵本も「まゆものきたかく」とする本文はない。D類／乙類第三種本文ではなく、村上真澄校本か、その親本に限りある誤写と思しい。

(2)は、中西氏が「物語本文を直接に引くのではなく、場面や事柄を知的興味から総括して掲出しているもの」と指摘された、『目録』ならではの記述である。「尼髮と成て後又一向に剃る事」は、吉野の聖が中納言に唐後の母君の半生を語った条に該当する。

尼になりて隠れつつ、逢ひ給はざりければ、この宮も、ゆくへも知らずなげきて、やみ給ひにけり。そのほどに孕まれ給ひにけるは、尼になりてのち生れ給へり。女にてもし給ふなるべし。心憂しとても、愛執の煩惱離れがたきものなれば、まざるるかたなき山の隅にも、見知るべき人なければ、身に添へておはしますなるべし。その君生れ給ひてのち、ひたぶるに頭おろして、法師のやうにおこないて、

(卷三・二〇四)

唐后出産後、愛執に苦しむ唐後の母君が尼割ぎの髪をすつかり剃り果てて修行に励んだ、という一連の出来事を読解し、まとめた(2)の場合、偶然の一致ではないだろう。同一人物の読解によるものかと考えられるのである。

なお、村上真澄校本には重複の注記が3箇所ある。

- I 卷一・五十四オ3「ある事なん是ヨリ上ニ見エタル也〇すきくしきなん人」とあり、「〇」以下、六十ウ3「あるやうある事なん」まで重複。
 II 卷一・八十九ウ1「きく」から九十オ1「この中納言」を線で囲み、重

複を示す。
 III 卷一・九十八ウ1「なき給」から同2「なつかしく」を線で囲み、重複を示す。

Iは、「なん」の目移りによる。「是ヨリ上ニ見エタル也」や、五十四ウ1の右肩「此前見上」、六十ウ3上部空欄に「以上重複」ともあることから、このかなりの重複は、親本のそれをそのまま写したものと推定できる。重複分を削除せず、親本の姿を留めようとする書写者の態度が看取されよう。

四、村上真澄校本は『目録』依拠本か？

こうしてみると『目録』の依拠本こそ、この村上真澄校本ではないかという気がするが、判断に躊躇している。それは卷四・八七ウに、書肆須原屋茂兵衛の仕入印「仕入(マル須)千鐘房」と墨書「千鐘房元本」が存するからである。徳川斉昭(寛政十二年(一八〇〇)―万延元年(一八六〇))に献上される以前のいつかの時点で、村上真澄校本は書肆に流通していたことになる。

村上真澄校本を『目録』依拠本だと仮定すると、次のようになる。
 文化十二年(一八一五)、小山田与清(天明三年(一七八三)―弘化四年(一八四七))が『群書搜索目録』編集を開始。

← 天保六年(一八三五)、村上真澄がD類／乙類第三種の本を書写し校合する。

← 千鐘房が村上真澄校本を仕入れる。

← 天保十年(一八三九)までに与清が村上真澄校本を入手し、「与清按此の物語蓋缺首卷」他、書入をする。そして、村上真澄校本に依拠し『目録』を編集する。

← 弘化三年(一八四六)、与清、蔵書を斉昭に献納。

『彰考館図書目録 附焼失目録』記載の写本二点どちらにも「小山田本」と記されていないのは、何かの手違いによるものであろうか。しかしながら、どうも書入と本文が同筆に見受けられるし、与清自筆の諸写本と比べてみるに、与清の筆跡には似ていない。そこで、明確な根拠のない憶測ではあるのだが、次のような推察もできると思う。

天保六年、村上真澄が『目録』依拠本を書写し校合する。

← 千鐘房が村上真澄校本を仕入れる。

← 弘化三年以降に、献納された『目録』依拠本が失われる。

← 斉昭が亡くなる万延元年までの間、『目録』依拠本を補うために、彰考館の某が書肆から村上真澄校本を入手する。

もしも、『目録』依拠本が与清の所有であったならば、与清の蔵書庫擁書楼の本は閲覧・貸与されていたので、村上真澄が書写したのかもしれない。丁数・裏表を丁寧に記した『目録』は、依拠本と一緒に揃ってこそその索引である。そこで誰かが『目録』依拠本の姿をよく残した村上真澄校本で補ったとは、考えられないだろうか。それならば、村上真澄校本が『彰考館図書目録附焼失目録』に注記「小山田本」がないのも、納得できる。

むすび

以上のように、結論らしいことは示せなかったが、村上真澄校本に、『目録』依拠本の姿は確かにうかがうことができた。中西氏は『目録』と著者不明の『浜松中納言物語類標』が同一の依拠本を使用した可能性を示唆されているので、引き続き『浜松中納言物語』研究史の様相に迫るべく、村上真澄校本と『浜松中納言物語類標』の関係を検討したい。また、本文及び伝本研究の収穫として、校合の書入から近世初期の善本にアプローチする端緒を見出すことができた。こちらも他本の調査を進めていきたい。

村上真澄校本は実見の機会が得難く、複写不可でもあるので、国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムを同館にて閲覧するのみで、本稿を成した。影印を掲載して、是非、諸先生方に筆跡に関する御教示を仰ぎたいところであったが、残念ながらかなわなかったことを記しておく。

【注】

(8) 注(2)池田氏論文掲出の14箇所。

(9) 共通脱行箇所以外で補入印と傍書があるのは、もう一箇所、「おもやせたるしも〇めつらし」と（巻四・八十四ウ6 『校本』では六九

二頁8行目）だが、他本に脱落はなく、書写者による脱落としい。共通脱行箇所11も書写者による脱落であったと思われる。

(10) 鶴見大学図書館蔵祖型本・茨城大学図書館蔵菅文庫本以外は『校本』二

一三頁による。ただし、天理図書館蔵竹柏園文庫旧蔵本は電子複写にて確認したところ、(1)の本文であると判明した。

(11) 『校本』「諸本解説」三六頁。

(12) 須田哲夫氏・佐々木新太郎氏・小野威氏「未紹介本調査報告3・4 茨城大学図書館所蔵菅文庫本『浜松中納言物語』について」（『大東文化大学紀要』第34号 平8・3、第35号 平9・3）、「茨城大学図書館所蔵菅文庫本の概要」（『校訂 浜松中納言物語』）。

(13) 引用・頁数は 阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏・鈴木日出男氏校注・訳 小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』による。

(14) 引用・番号は菅野禮行氏校注・訳 小学館新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』による。

(15) 引用は新訂増補国史大系『令集解』（吉川弘文館）による。

(16) 引用は大曾根章介氏・金原理氏・後藤昭雄氏校注 岩波新日本古典文学大系『本朝文粹』による。

(17) 引用は白田甚五郎氏・新間進一氏・外村南都子氏校注・訳 小学館新編日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』による。

(18) 引用は吉川幸次郎氏・小川環樹氏編・高木正一氏注 岩波書店中国詩人選集『白居易』（岩波書店 昭33）による。

(19) 和歌本文・歌番号の引用は『新編国歌大観』による。

(20) 注(19)に同じ。

(21) 引用・頁数は中野幸一氏校注・訳 小学館新編日本古典文学全集『宇津保物語』による。

(22) 引用は玉上琢彌氏編『紫明抄 河海抄』（角川書店 昭43）による。

(23) 小島憲之氏・直木孝次郎氏・西宮一民氏・蔵中進氏・毛利正守氏 校注・訳 小学館新編日本古典文学全集『日本書紀』による。

(24) 引用は『本居宣長全集』（筑摩書房 昭62）による。

(25) 与清の『群書搜索目録』編集から献納までについては、与清自身の『松屋筆記』（国書刊行会 明治41）や『擁書楼日記』（『近世文芸叢書』第十二日記 国書刊行会 明治45）による。また、天野敬太郎氏「小山田与清と『群書搜索目録』」（天野敬太郎著作集『書誌索引論考』 日外アソシエーツ、昭54）、岡村敬二氏『江戸の蔵書家』（講談社 平8）を参考にした。

付記
本稿は、平成二十九年度科学研究費補助金 基盤研究（C）研究課題番号17K02439 「書入をふまえた『浜松中納言物語』新校本の作成」による研究成果の一部である。